

## 徒然の記 その十一

### 縁日のアセチレンランプ

立石(東京都葛飾区立石)では、七日、十七日、二十七日と七の付く日に縁日が開かれていました。

太平洋戦争で一時中断していましたが、戦争が終わるといち早く復活したのです。

縁日で道端に屋台が並ぶのはもちろん夕方から宵の口でしたので、明りが欠かせません。

当時は電力事情が極めて悪かったので、はじめの頃は屋台を照らす明かりには、もっぱらアセチレン・ランプ (acetylene lamp)が使われていました。

炭化カルシウム(カルシウムカーバイド  $\text{CaC}_2$ )と水を反応させて発生したアセチレンガスを

燃やすので、ランプを点けると辺りに独特の臭気が漂いました。

電力事情が安定して来ると白熱電球が使われるようになって淘汰(とうた)されてしまいましたが、アセチレンランプは古い時代の縁日の風物詩のひとつと言えるでしょう。

青白い炎とあの臭いはシルバー世代にはこの上なく懐かしい代物です。